



TITLE:

雲

AUTHOR(S):

鯨坂, 二夫

CITATION:

鯨坂, 二夫. 雲. 静脩 1964, 1(2): 1-1

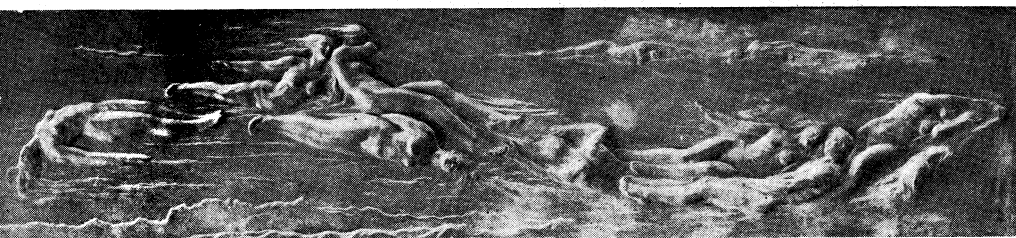
ISSUE DATE:

1964-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36219>

RIGHT:



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1964年 11月

Vol. 1, No. 2

雲

鯨坂二夫

「京都大学に雲がある」——このことを知る人は少くない。それは、すぐれた美のかたちを秘めながら、静かに、ほんとに静かに流れている。大学の正門をはいて、正面に樟の木。玄関の石段をあがって見あげるがいい。そこに「雲」がかかげられてある。(原型は附属図書館の玄関にあり) 中央より右にたくましい肉体を斜めに流した2人の男像。自由と憧憬とをその全身に秘めて、1人はその右腕に美しい女像を抱く。誘うがごとく、また、かばうがごとく。左手はつつましく膝に。そうして、それにつれそう美しい肢体の女像が、すべてをささげるほどの情念をこめて、眸は男像の顔に注ぎ、右手をわずか斜めうしろにひろげる。

左の四つの女像の1人は悲しみに顔を覆い、その爪先きに背面の男像が手をさしのべているのは何の意味であろうか。遠景の三つの女像は、文字通り水平に流れて、遠い日の思い出を追う。

斉藤素戔作のこの「雲」は、夢見るがごとく流れたわまれる男女の群像からなりたっている。私のようなものでも、その下にたたずんで、ブロンズに浮き彫りされた「雲」を見上げると、不思議な感動を覚える。それは昭和のはじめ、この大学に入学した喜びにひたったころでも、現在、そこに職を奉ずるようになった日にも、何のかわりもない。

「雲」が作られたのは、大正13年、軍閥はなやかな時であった。この男女の裸体の浮き彫りが問題になったのは当然である。そのもつ芸術的な価値や、品格というようなものが、それにふさわしく評価されないばかりか、かたくなな旧来のものの考え方、見方は、やがて美の世界への圧力となって、この「雲」の上にも不当な嵐を呼び起こす気配さえもあらわれ、これを芸術品として、その嵐から守ろうという識見の人のないままに「雲」の行方はあやぶまれた。

その時である。京大総長荒木寅三郎先生は敢然としてその「雲」を京大に引きうけ、それを正面玄関に高くかかげられたのであった。以来「雲」は京都大学のあゆみとともにある。学問の真理と研究の自由を背骨とする大学は、また、美の擁護者でもあったのである。

それ以来、この学園に起きたさまざまなできごと、そこに伝わる数々の歴史を秘めて「雲」は流れ続けている。いま、この「雲」の下にたつて、それを仰ぎ見るひとたちは、この事実をはたして何と感じているであろうか。(教育学部教授)